

ラーニング・マネジメント・システムを活用した反転授業の工夫

坪井泰士

阿南工業高等専門学校創造技術工学科一般教養

1. はじめに

教育におけるキーワードの1つが、アクティブ・ラーニングである。このことは、文部科学省による中央教育審議会への諮問(平成26年11月20日)、中央教育審議会の大学教育部会配付資料「大学教育部会の審議のまとめについて(素案)」(平成24年3月7日)からも、確認される。

アクティブ・ラーニングでは、「一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」(溝上慎一「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」(松下佳代編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年、p.32))とされ、効果的な実施のための手法として反転授業に注目が集まる。

一方で、「準備に時間がかかる」、「講義VTRの事前視聴をしてこない」、「アクティブ・ラーニングとの接続が難しい(話し合いが拡散して、学習成果が見えない)」などの懸念や課題などから、その浸透には時間を要している。

授業後の講義VTR視聴をふまえ、実授業では「書く・話す・発表する」ことによるアクティブ・ラーニングを実施するという、一般的とも言えるスタイルの反転授業について、これらの課題を解決し授業者の不安を軽減する手法について記す。

2. 授業概要

全15回の授業を、中間試験1回を除きもう1名の教員と2分し、7回を担当した。授業回数毎に担当教員をあらかじめ定め、受講学生も含めて共有の上で実施した。

第1回授業を除き、すべての授業について、事前の講義VTR視聴もしくはテキスト該当部分の読解を求めた。授業では、その視聴や読解をふまえ、グループワークや全体共有など、アクティブ・ラーニングを実施した。

授業名	「日本語の表現」
開講対象	5年生、選択授業、前期科目2単位
授業目的	社会に必要な口頭・文章表現能力の基礎を理解し、適切に使用して表現できる。

3. 講義VTRの制作と提供

講義VTRの制作の意図は、これまでは授業において実際に授業者が口頭で伝えてきたことをVTR化することである。これにより、授業での説明を簡略化でき、アクティブ・ラーニングの時間を設け、学生の理解を深めることが期待できる。

学生の集中力や予習に割ける時間も考慮し、VTRは2本まで、それぞれ5分以内とした。すなわち、すべての説明をVTR化するのではなく、説明の中核部分を対象とすることになる。本授業の場合は、獲得すべき知識量はそう多くなく、それを実践で使えるようにトレーニングすることに主眼があったため、授業説明のVTR化については容易であったが、より獲得すべき知識量の多い授業においては、VTR化の対象とする部分の切り出しに留意することが大切であろう。授業の到達目標に関わるもの、学生の理解が困難なものなどをVTRにすることで、学生は予習時だけでなく理解に懸念を感じた際などにも視聴が可能となる。

今回の制作は、フリーのソフトOffice mixをPower Pointにアドインすることにより、行った。

講義VTRはラーニング・マネジメント・システム(以下、LMS)により公開し、小テストとレポートについてもLMS上での解答と提出を求めた。レポートの添削、再提出指導もLMS上で行った。

4. 予習成立の工夫

予習してこない学生への対応に苦慮する声、例えば「講義VTRの事前視聴をしてこない」という授業者の悩みを軽減する1つの手法を提示する。予習も学生による自立的な学びであるから、アクティブ・ラーニングはここから始まっ

ていると理解してよいだろう。その学びで得た知識を授業時に確認し、理解をふまえた活用としての意見の表出やファシリテーションの形でリフレクションを行うのである。すなわち、この予習なくして、反転授業は成立しないし、そこですべきであった説明を授業内で行えばファシリテーションなどの時間を確保することも困難となる。

これまでの経験から、学生が予習をしない原因として、次があげられると理解している。

- ・課題が明確でない、難解すぎる
- ・課題による学習成果が不明瞭すぎる
- ・評価が曖昧、他学生もやっていない

課題設定が不十分であること、正当な評価が未達であることによる。これらを、解決すれば、学生による予習は可能ではないかと考えた。

次に示すのは、予習成立の工夫である。

- ・小テストとレポートは、講義 VTR もしくはテキスト読解が必要なものとして設定
- ・授業時には、当該授業のまとめ課題を解説
- ・授業時には、予習課題を解説
- ・LMS により課題を配信、回答も LMS 上
- ・課題は、VTR 視聴やテキスト読解により 1~2 時間を想定
- ・授業後に課題を配信し、4 日後を締めきりとして周知（毎回同じ）
- ・レポート添削を LMS 上で実施し、到達期待レベルに未達成のレポートは提出指示
- ・小テスト解答、レポート合格を次回授業への出席条件として周知

5. グループワーク成立の工夫

学生のこれまでの学習の様子や、学生への聞き取りから、グループワーク（共同作業、話し合い、それらをふまえた発表）成立にも、前章の原因が関係していると推察した。これらを解消しないままのグループワークでは、話し合いが拡散（雑談に移行）し、時間だけが過ぎる。

とくに最後の項目、「他学生もやっていない」への留意が必要であろう。先の原因については、程度の差はあれ多くの教員は対応してきている。後は、あらためてその手法を見直し、「何をいつまでにやるのか（課題の明確化）、それは授業や学生の成長とどうつながるのか（課題

の目的と意義）、評価はどのようになされるのか（評価の透明化）」を検討すれば自ずと改善へと進む。しかし、「他学生もやっていない」については、これまで看過してきた授業が散見される中、「やりなさい」というだけの教員の指示が効果を発揮するとは言いがたい。これは、クラスルーム・コントロールの問題である。

学びの場としてのクラスを、学生とともに構築してきたかが問われている。「単位をとるためにはまず出席し、とりあえず席について、あまり私語せずにはぼうっとしていればよい（中には、居眠りや携帯ゲーム、LINE も許容事項に含めている学生もいる）」とする学生を生み出してきたのは、これまでの授業で。

この改善には、クラスルーム・コントロールを含めた授業指針を、あらためて学生に明示し、それに則って授業を進めるとともに適宜、学生の意見を心得て指針を是正、また、学生との共通理解を図り、指針から逸脱することなく最後の評価にまで至ることしかない。それにより、アクティブ・ラーニングの環境が整っていく。

6. おわりに

このような授業を実施したところ、一定の効果を確認した。

予習時間は 1 時間以上 48%（30 分以上だと 92%）、復習時間は 1 時間以上 19%（30 分以上だと 74%）であり、いずれも全くしていない学生はいなかった。

授業に真剣に取り組んだかの問いには、「真剣」89%の回答であった。

記述意見には、「毎週の課題で着実に力がつく」、「課題の指示が明確」、「考える必要のある課題」、「(グループ課題では)夜でも学生で課題を進められる、教員とコミュニケーションを取りながら進められる」、「毎時間、課題への添削があった」、「自ら考えて取り組む授業であったのでやる気がみなぎる」などの好評価がほとんどであった。否定的意見としては、「課題が多すぎる」があった。

これらから、ここで提示した手法は、反転授業の課題を解決し、有効な学習を進めることについて、一定の効果があったと考える。